

『伝道宗教による異文化接触—天理教コンゴ伝道を通じて—』

森 洋明 グローカル新書 14 2013 年

おやさと研究所教授

金子 昭 Akira Kaneko

体験から語る言葉は常に力強い。著者の森洋明氏は天理大学を卒業後、1986～89年、20代前半で天理教コンゴブラザビル出張所に勤務。2000年以降は、コンゴブラザビル教会の「教会付き顧問」として毎年コンゴに出向し、教義研修会ははじめ各種講習会を実施するとともに、現地の信者とも直接議論を重ねてきた。本書は、コンゴでの実体験に即しつつ、天理教の異文化伝道の現実と課題を説き起こしたものだ。

天理教によるコンゴの布教伝道は、1960年に二代真柱がコンゴのブラザビルを訪問した時に始まる。66年にはコンゴブラザビル教会が設立、教祖130年祭の挙行される2016年には創立50周年を迎える。

半世紀にも及ぶ天理教のコンゴ伝道は、しかし大波に翻弄されてきた歴史でもあった。信者たちは、コンゴの内戦や民族対立のために肉体的生命が危機にさらされ、また教会の芯たる教会長をめぐる問題によって信仰的生命を揺さぶられたのである。

前者の話として有名なのが、1967～71年の清水國弘2代会長時代、教会を挟んでの銃撃戦のさなか、おつとめが勤められたことだろう。その後もコンゴの政治情勢は混乱をきわめ、一方、森氏も危うい場面に何度か遭遇している。そうした激動の時代の中を、現地の人々は命がけで信仰を守り抜いたのである。

後者の話は、それが特定の個人（ノソング4代会長）についての問題であるがゆえに、きわめて書きにくい。しかし、森氏があえて書きにくいことを書いたのは、コンゴの布教伝道を検証し、これからの展開に生かすために不可欠な作業だからであった。しかもそれは、ノソング氏の会長時代（1975～2002年）、同氏と教会本部側との交渉に通訳として立会い、現在は教会付き顧問である森氏だからこそ、書くことができたのである。その意味で、本書はコンゴ伝道について実に得難いドキュメントとなり、森氏の意気込みもそこにある。

1960年、ノソング氏は2代真柱のタクシー運転手になったことがきっかけで入信し、75年にはコンゴ人として初めての教会長になった。だが、この会長任期中に、教会本部との間で様々なあつれきを起こし、また11年続いたコンゴの「鰻の家」診療所も閉鎖されるなど、教勢が進展したと言ひ難かった。しかしながら、内戦で銃弾の飛び交う中を、命をかけて教会を守ったのは、まさに彼の「誠真実」の姿であった。また、新しい布教所が開設されたり、現在も盛んに行われている鼓笛隊活動が始められたのも大きな功績である。

現在の会長（バゼビバカ5代会長）もコンゴ人であるが、教会で中心になっているコンゴ人信者たちは、ノソング時代に多くのことを学んだ。ノソング氏は、結果として、次代を担うコンゴ人信者たちの信仰心を鍛え、試し、育成したのである。

そして、彼自身も実のところ、コンゴ人信仰初代として、言語も文化も異なる世界宗教に直面し、おおいに戸惑ったに違いない。森氏は、ノソング氏の立場にも身を置いて考え、その眼差しは優しく暖かい。

一例を挙げると、世界宗教の“会長”すなわち Chef の理想型のギャップがある。天理教の教会長たるもの、自ら率先して

おたすけに廻り、より集う信者一人ひとりに声がけし、路上のゴミ拾いなどのひのきしん活動も率先して行う。これが第一線で活動する会長の理想型である。

しかし、コンゴ社会では、世界宗教の Chef はそんなことをしない。運転手つきの高級車に乗り、多くの信者が待ち受ける中を最後の登壇者として現われるのが当たり前である。ノソング氏は、教会本部サイドから「会長らしくつとめてほしい」と言われて、「会長」をそのまま Chef のイメージで読み替え、天理教の会長らしからぬ振る舞いに出してしまったのではないか。（現在、バゼビバカ5代会長は、信者たちから Chef ではなく「会長さん」と、不翻訳の日本語で呼ばれている。）

深刻な問題を数多く取り上げている本書であるが、それでいて決して重苦しい印象を与えないのは、森氏は常にユーモアの姿勢で臨んでいるからである。実際、本書の中には、さりげないユーモアが随所に織り込まれている。ハッピーを着てコンゴの住宅街を歩いていると、空手の格好をまねる子どもたちに出会うという。しかも黒帯だし、手の甲に参拝ダコもある。ひょっとしたら自分は、空手の達人のように見られているのかもしれない。これなど、思わず微笑んでしまうエピソードだろう。

こういうエピソードの中にも、実は日本人なら何か武道が出来るのではないかというステレオタイプが隠れている。ハッピーにいくら TENRIKYO と書いてあっても、それが天理教という宗教だという認識は無く、またたとえ天理教の布教師であると説明しても、宗教家である前にまず日本人だということが意識されてしまう。そうした類の問題が異文化ギャップとなって、信仰の問題にも深く及ぶのである。仮に言葉そのものが通じて、そこで理解される意味が伝わっていないことがありうるのだ。

宗教の布教伝道には、「象徴的レベル」での相互理解（青木保『異文化理解』）が求められる。「親神様の守護にお礼を申し上げる」と片言の言葉で伝えられるかもしれない。しかし、なぜ「お礼を言うのか」、「日々のご守護とは何か」、そもそも「親神とはいかなる神か」ということになると、相当の語学力、また現地の人々の理解に即した表現が必要である。

コンゴでは公用語はフランス語であり、それが「母国語」として使用されるが、多くの人にとって日常的に使う言葉は「母国語」ではなく、あくまで「母語」である。そもそもコンゴ国内には3つの大きな民族群があるが、言語的にはさらに細分化され、それが「母語」である。それゆえ、異文化伝道における言語習得の重要さは非常に大きい。

本書にはそのほか、コンゴにおける貧富の格差の問題、社会貢献活動の必要性、世代交代や現地化の問題など、興味深い話題が数多く取り上げられている。海外伝道を志す若い世代にはぜひ一読を勧めたい。

